

【漁況】 [マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成29年は14万5千トンとなりました。

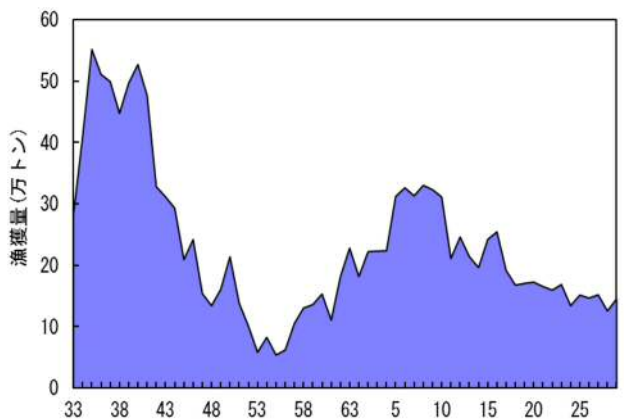


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、串木野沖、甑島周辺でマアジ仔（1歳魚：2019年生まれ）、マアジ中（2～3歳魚：2017～2018年生まれ）主体に漁場が形成されました。

薩南海域では、志布志沖、野間池沖、内之浦沖、立目崎沖でマアジ豆、小、中小（1～3歳魚：2017～2019年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で834トンの水揚げで、前年の251%及び平年の76%でした。

3. 県内の令和2（2020）年4～6月期の見とおし

漁獲主体：マアジ小（1～3歳魚：2017～2019年生まれ）で、期後半はマアジ豆（0歳魚：2020年生まれ）も混じる

来遊量：前年・平年を上回る

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターン等から予測しました。

来遊量は、直近の漁獲動向から予測しました。前期（1～3月）と今期（4～6月）の漁獲量には正の関係があります。この関係に基づくと、今期の来遊量は前年・平年を上回ると考えられます。

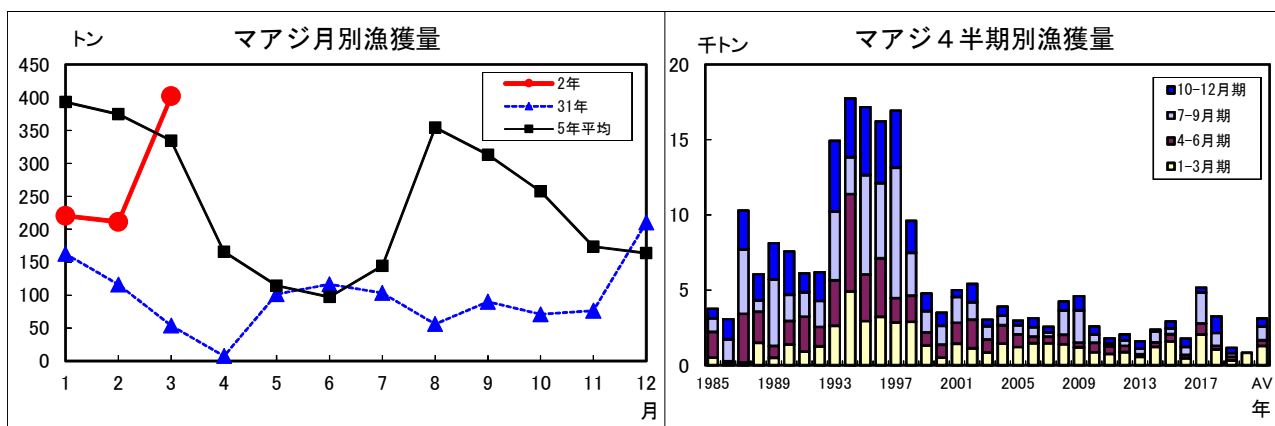


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV）、令和2（2020）年3月25日までの水揚量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、平成29年は51万8千トンとなりました。

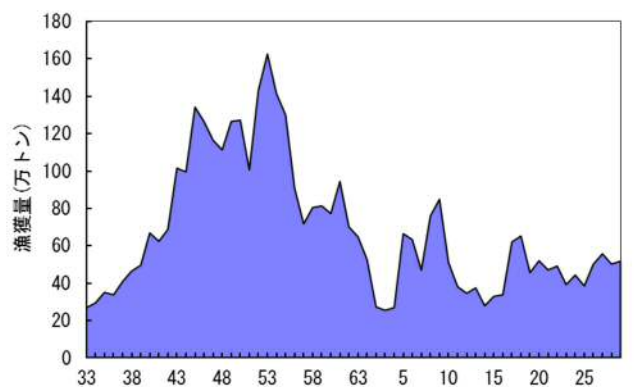


図 全国のサバ類漁獲量の推移

年

2. 県内の令和2（2020）年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甕島周辺、串木野沖でサバ類豆（1歳魚：2019年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、1、2月に馬毛島、湯瀬でゴマサバ中、中小（3～6歳魚：2014～2017年生まれ）主体の漁場が形成されました。2、3月に志布志沖でマサバ中、中小（3～7歳魚：2013～2017年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で10,197トンの水揚げで、前年の104%及び平年の156%でした。

3. 県内の令和2（2020）年4～6月期の見とおし

漁獲主体：マサバ中、中小（3～7歳魚：2013～2017年生まれ）※期前半

ゴマサバ中、中小（3～6歳魚：2014～2017年生まれ）主体に、ゴマサバ豆（0歳魚：2020年生まれ）も混じる

来遊量：前年並で、平年を上回る

（根拠）

今期は、竹島や馬毛島、種子屋久周辺でゴマサバの産卵群が漁獲の主体となります。これらの海域は太平洋、東シナ海両系群の資源量と正の関係がありますが、東シナ海系群は横ばい、太平洋系群は減少傾向を示していることを考慮すると、ゴマサバの来遊量は前年を下回ると考えられます。しかしながら、直近の漁模様を見ると、今期も前年並のマサバの来遊があると考えられ、サバ類全体としては、前年並で、平年を上回ると考えられます。

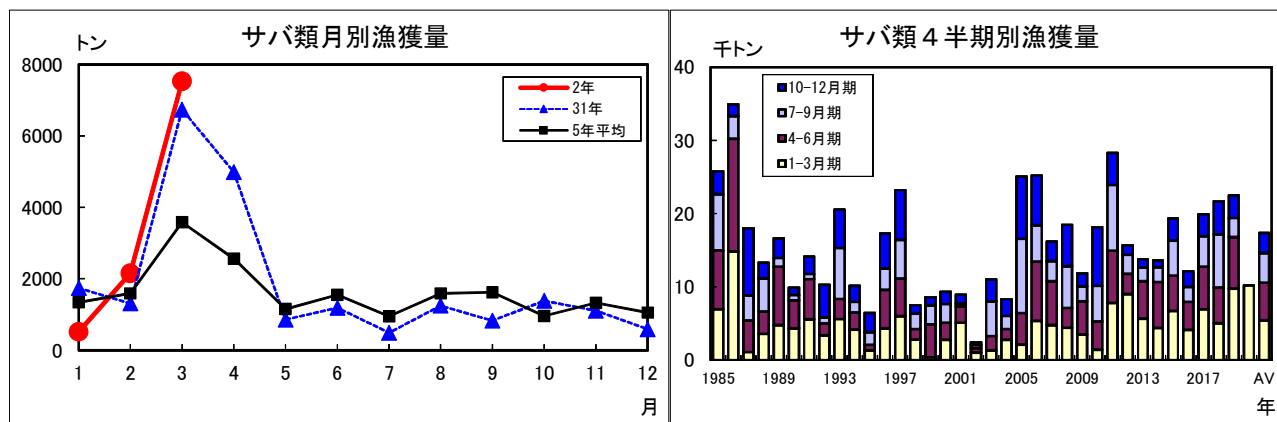


図 サバ類まき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和2（2020）年3月25日までの水揚げ量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14から22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き、平成29年には50万トンとなりました。

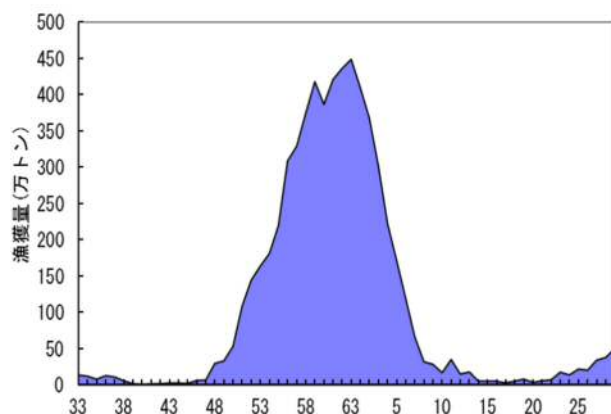


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の令和2（2020）年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、散発的に串木野沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

北薩海域の棒受網では、まとまった水揚げはありませんでした。

4港計のまき網では、5トンの水揚げで平年の2%でした。（前年は水揚げがなかったため比較できず）。

3. 県内の令和2（2020）年4～6月期の見とおし

漁獲主体：小羽（0歳魚：2020年生まれ）

来遊量：非常に低調であった前年並で、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

本年は、前年に引き続き非常に低調に推移していることから、来遊は前年同様ほとんど見込めないと考えられます。

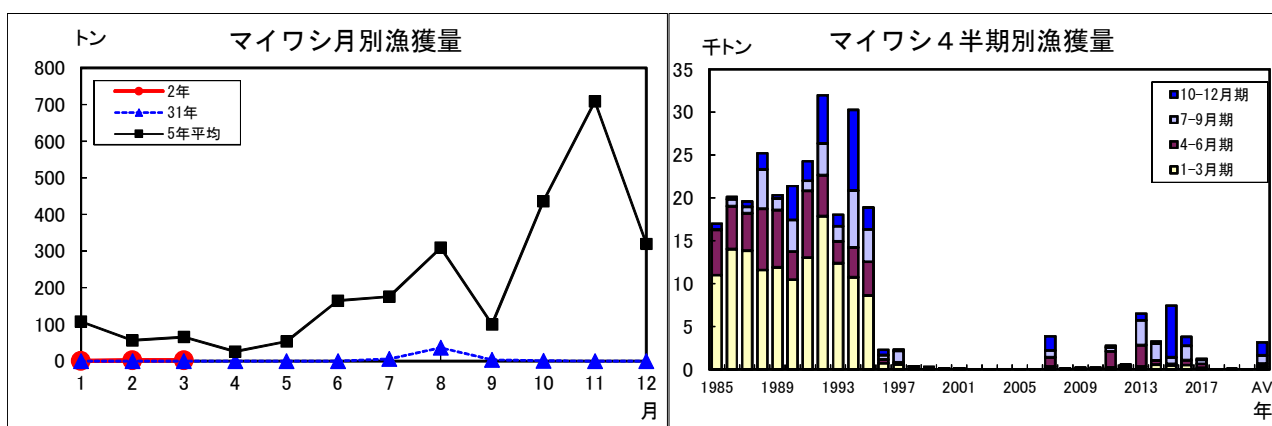


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和2（2020）年3月25日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成28年は9万8千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となり、平成29年は7万2千トンと減少したものの、高い水準を維持しています。

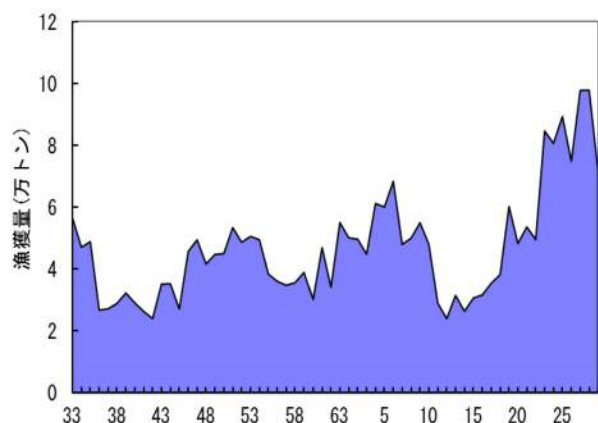


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、串木野沖、甌島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、立目崎沖、志布志沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中～大羽（1歳魚：2019年生まれ）主体に139トンの水揚げで、前年の90%，平年の17%でした。

北薩海域の棒受網では、水揚げはありませんでした。

3. 県内の令和2（2020）年4～6月期の見とおし

漁獲主体：4、5月の中～大羽（1歳魚：2019年生まれ）で、5月以降は小羽（0歳魚：2020年生まれ）が混じるでしょう。

来遊量：前年並で、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる1歳魚（2019年生まれ）の前期の漁獲量は前年並で、平年を下回って推移していることから、今期も前年並で、平年を下回ると考えられます。

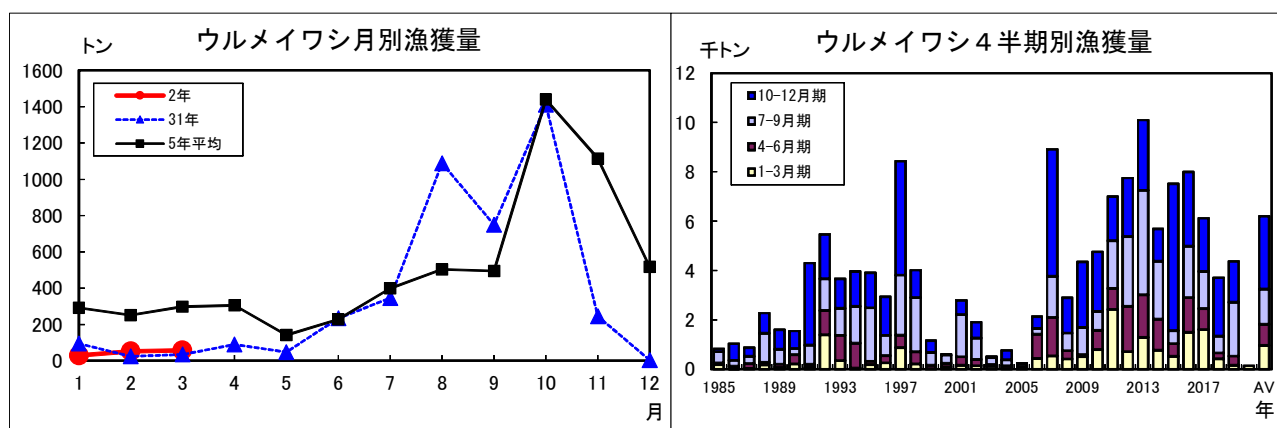


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和2（2020）年3月25日までの水揚げ量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成29年は14万6千トンとなりました。

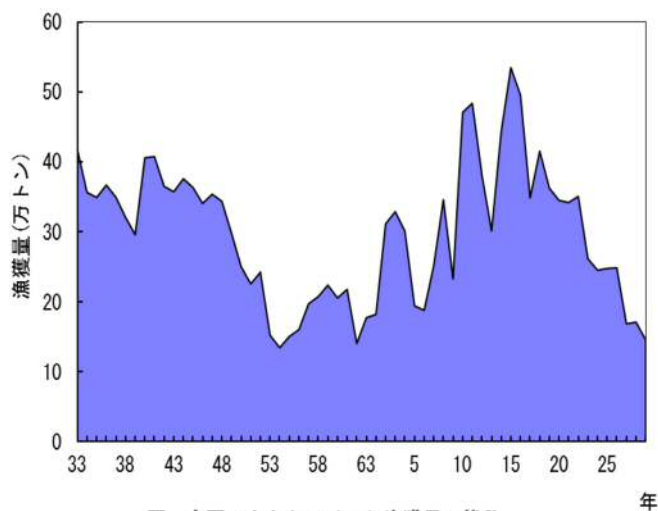


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、八代海で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場が形成されませんでした。

4港計のまき網では、小～中羽（0，1歳魚：2019年生まれ）主体に5トンの水揚げで、前年の11%，平年の1%でした。

北薩海域の棒受網では、43トンの水揚げで、前年の21%，平年の29%でした。

3. 県内の令和2（2020）年4～6月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽（0，1歳魚：2019年生まれ）

来遊量：前年，平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる小～中羽（0，1歳魚：2019年生まれ）の漁況は、前年，平年を下回り、県内の前年シラス漁も低調に推移したことから、前年，平年を下回ると考えられます。

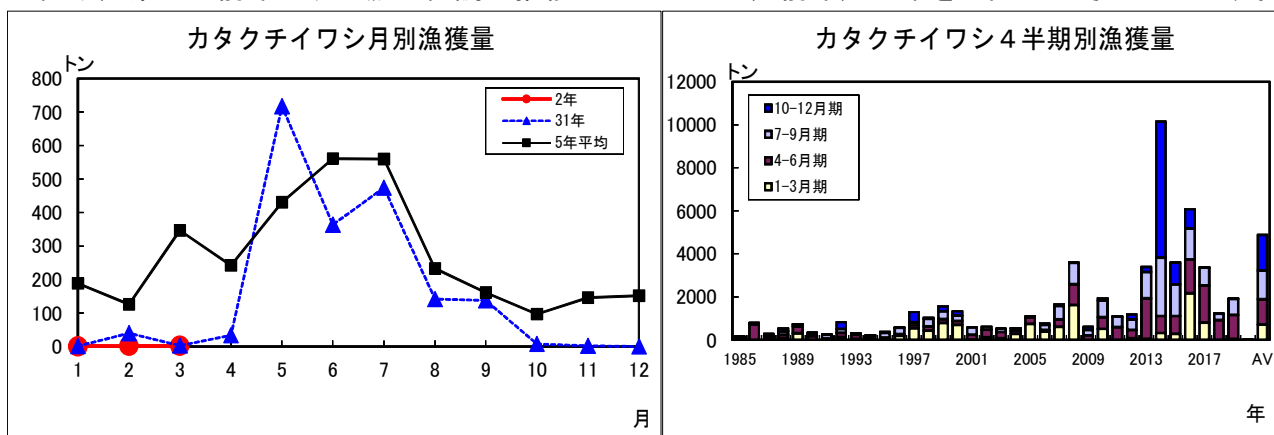


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV），令和2（2020）年3月25日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

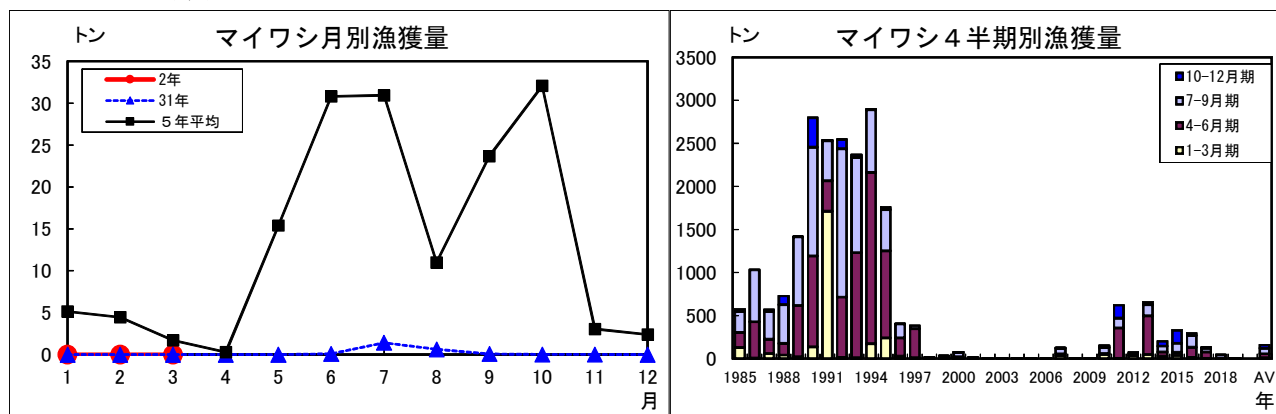


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

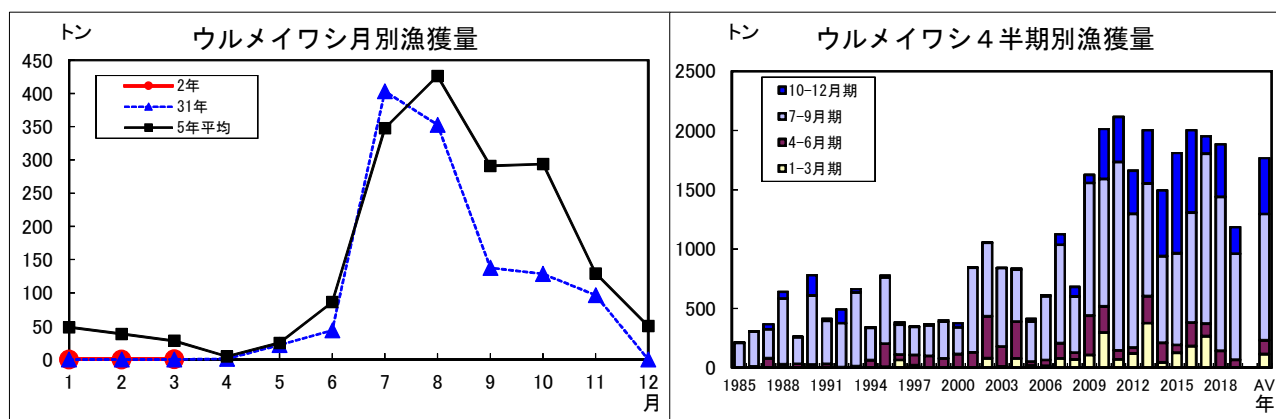


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

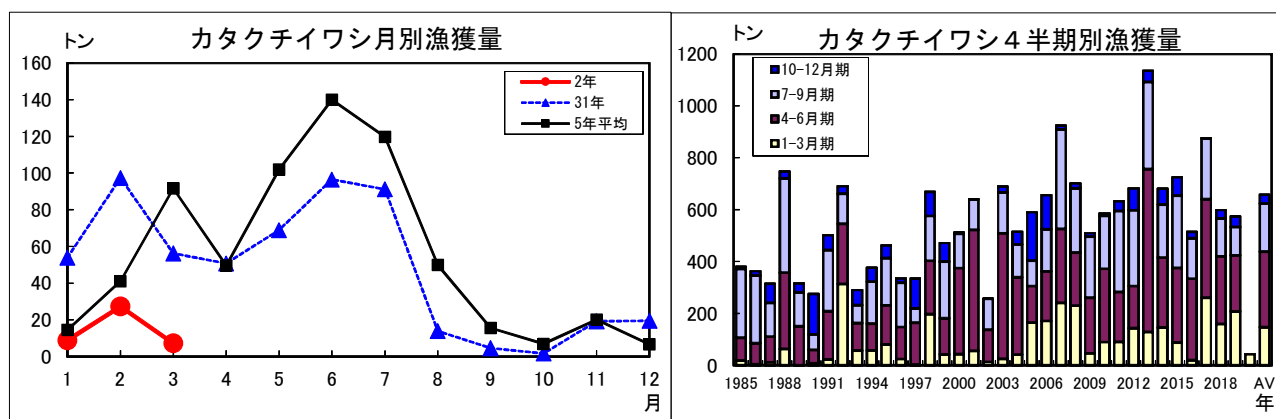


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 令和2(2020)年3月25日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和2（2020）年1～3月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから5,000トンの間での推移しており、令和元年は3,627トンとなりました。

4港計のまき網では、種子島および屋久島周辺でクサヤモロ豆、小主体の漁場が形成されました。期全体で691トンの水揚げで、前年の86％及び平年の125％でした。

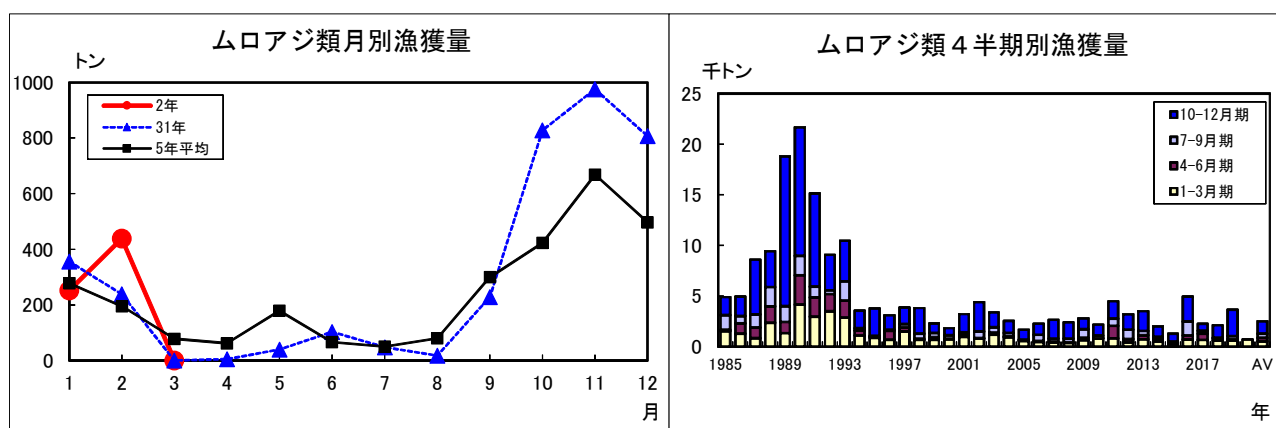


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年3月25日までの水揚げ量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の令和2（2020）年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンピークに一旦減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが、令和元年は1,211トンとなりました。

4港計のまき網では、主に志布志沖、屋久島南でオアカムロ小、豆主体の漁場が形成されました。期全体で256トンの水揚げで、前年の54％及び平年の49％でした。

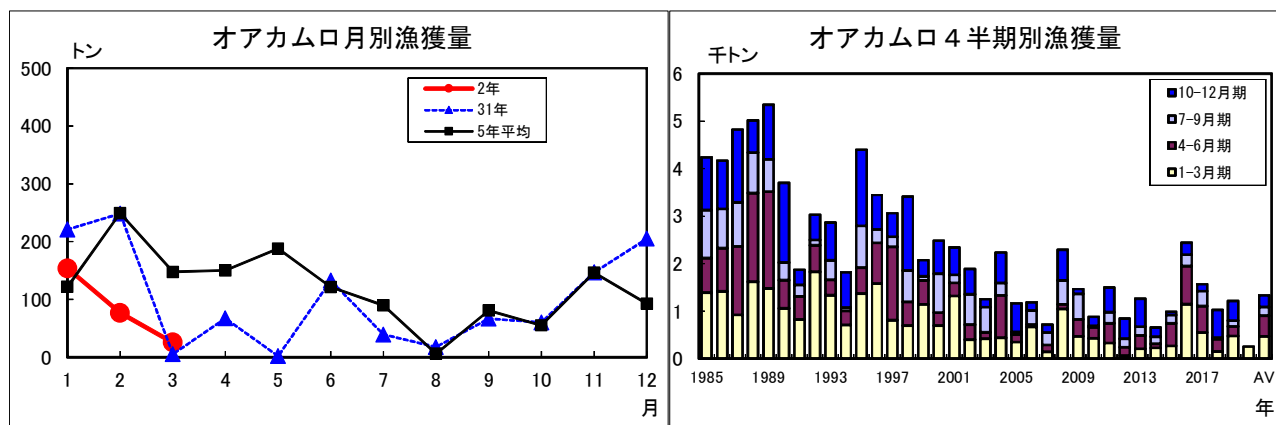


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年3月25日までの水揚げ量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4 港計）〉

県内の令和 2（2020）年 1～3 月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は、昭和 62 年から平成元年に 1,500 トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成 12 年から 15 年に再度ピークを迎え 15 年には 3,150 トンと最高を記録しましたが、平成 16 年以降は低調に推移し、令和元年は 361 トンとなりました。

4 港計のまき網では、野間池沖、串木野沖で小、中主体の漁場が形成されました。期全体で 205 トンの水揚げで、前年の 79 %及び平年の 88 %でした。

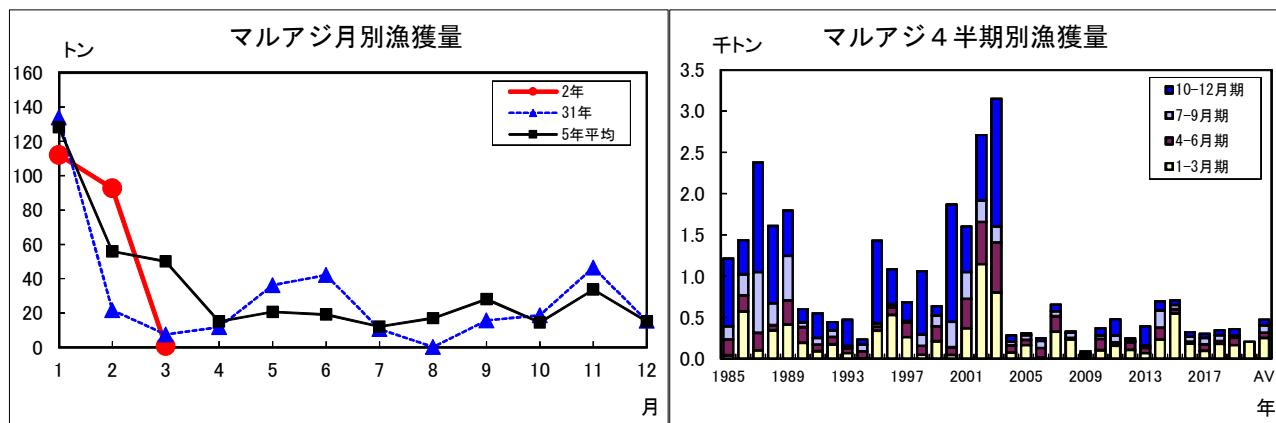


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV)，令和 2（2020）年 3 月 25 日までの水揚げ量を使用